

御申じょう（ごしんじょう）療法（3）

一般的に、科学とは、数字の組合せを方程式や化学式などで表現をして理路整然と説明できるものであると信じられています。それでも、その常識や条件ではどうしても説明できないときには、新しい仮説を考え、それに向かって研究するのが科学といえます。日本人が独占した今年のノーベル物理学賞は、まさに典型的な仮説から本物が見つかった例だ



と言ってもいいのではないのでしょうか。要するに、いろいろと経験や結果にぶち当たるたびに、逆にこれはどうして・・・？と研究をはじめるといっても多いのです。医学こそ、その典型であり、物理・数学のように紙の上の理論から導き出すことはほとんどといったほどありえません。医学の場合は、まるで場当たりのですが、そのちょっとした経験に対して“えっ” “これはなぜなのだろうか？”と気がつくか気がつかないかの違いなのです。

御存知のように生命の営みは 60 兆個の細胞からなる身体とまだなんにもわかっていない“心”が一体となっています。一つ一つ解決するのは本当にやっかいで、とても割り切れる数字なんて出せそうにありません。たしかに近年、医学は飛躍的に進歩しましたが真理はまだまだ雲の上はるか・・・といったところです。

“御申じょう療法”は、2本の鍛え抜かれた純金の延べ棒を使って、頭の前から手足の先端までくまなく擦りながら押しつける療法で、貴田晞照師が始めました。貴田師は、元々、鍼灸を中心とした東洋医学を治めていましたが、それにあきたらず、この御申じょう療法を考え出し、たくさんの人に治療を施しながら、年に何度も奈良の大峰山にこもって修行も続けています。修験道・・・とか、次に出てくる言葉“邪気”・・・などと話すと、もうそれだけで新興宗教に入れてしまう傾向がありますが、それならエビデンス（証拠）はどうなのか？といわれると、確かに今のところ科学的なエビデンス（証拠）がバックにはありません。ところが、エビデンスがあろうなかろうが、とにかく治療の結果が素晴らしいのです。疼痛を取り去ることに対して余りにも差があるために、1、2の大学病院の麻酔科が、やっとう重い腰を上げて、研究をはじめたばかりです。未知のものに対して、また、自分たちの力では不可能なことに対して、われわれ医師は本当に謙虚になるべきでありましょう



■痛み

第1回と第2回ではあの癌の苦しみの根幹をなす痛みについてお話ししました。この痛みさえなければ、治療する上でも生活する上でも非常に楽に過ごせることはいうまでもありません。急性の「痛み」にはまずまずの説明がなされており、納得もできます。それは“組織損傷”（物理的・化学的なものや細菌・ウイルスなどによる感染で引き起こされて組織が傷つくこと）が起きれば、そこで発生する“サイトカイン”（細胞から分泌されるタンパク質で、特定の細胞に情報伝達をするものをいい、特に免疫、炎症に関係したもの）が、神経を刺激して不快な感覚、いいかえれば“痛み”を引き起こす・・・というものですから、なんとなく、局所の傷から何かが出てきて刺激するんだな・・・と分かるような気がします。しかし、これが慢性の痛みとなると全く原因と発生メカニズムは説明できなくなります。“組織の損傷”そのものがなくなった後、サイトカインも分泌しなくなってからでも続くからです。ほとんどの慢性の痛みは原因がわかりませんが、すこし、具体的に上げてみましょう。例えば、帯状疱疹（皮膚にヘルペスウイルスがとりついて起こす皮膚病）が治ってしまった後の激しい疼痛、怪我や病気によって足や手を切断を切断した後、あるはずもない指の先などが痛むという幻肢痛（げんしつう=Phantom Pain）、リウマチの患者さんの痛み、糖尿病患者さんによく見られますが、時には原因不明の手足の末梢神経のしびれと痛み・・・など、枚挙にいとまがありません。これだけ医学が進歩しているにもかかわらず、原因も治療法も全くと言っていいほど分かっていません。これに対してどんなことをしているかといえば、薬物療法が主です。硬膜外ブロックや薬物による脊髄の一部破壊や切除などもあります。あまり効果は発揮していないのが現状です。それもそうです。原因が分かっていないのですから。特に“幻肢痛”に対しては、全くと言っていいほど治療の効果がないようです。

■痛みに対する“御申じょう療法”

第1回と第2回には、癌の患者さんに対して一番のストレスになる疼痛から解放してあげて、制癌剤を効果的にするという面を強調しました。進行程度や癌の種類にもよりますが、御申じょう療法だけでも軽快した症例もかなりあるようですが、やはり、制癌剤の治療を増幅し、副作用を予防するということが、一番だと思います。

一方、先ほど上げた意味不明の慢性疼痛に対する効果は、他の治療法に比べて断然群を抜いています。実際に、治療しておられる現場で、定期的に同じ患者さんの経過を見ました。一体なぜ、このように痛みが取れるのかということが私には判断は出来ませんでした。患者さんは一応に、身体が軽くなったといわれ、全く奇跡だと喜んで次々に帰っていきます。医師としてただ呆然と見送るということになります。治療法は、第1回と第2回で書いたように、2本の鍛え抜かれた純金の延べ棒を使って、頭先从から手足の先端までくまなく擦りながら押しつける療法なのです。貴田晞照師の治療を見学しますと、所々でピタッととまり、ぐいぐいと押しつけていきます。そのポイントに至ると貴田師に

も自分を通して気電気が流れるのが分かるといいます。1時間以上かけて身体中をくまなく押しつけ擦ってもらううちに、必ず、身体が軽くなったという印象を話します。驚くべきことです。

一般的に病的な組織と正常組織には電位差があるということは分かっていますが、それが対外的にどのように作用するかということはわかっていません。それが免疫細胞の働きや、制癌剤などを受けつけなくしているバリアーになったり、痛みの原因になったりしているという説もありますが、はっきりしているわけではありません。しかし何かがあるはずなのです。御申じょうで、電位差の潜んでいる部位を手探りで見つける。貴田晞照師はこれこそ“邪気”であると表現しますが、原因が電磁波であれ、電氣的な蓄積であれ、この呼び方はこの“御申じょう”療法を確立した貴田師に敬意をはらい、“邪気”と呼ぶべきでしょう。1日に30~40人の悩める人に対して淡々と治療して、直していつている現実を見ると、驚天動地としかいえないのです。子供さんの激しいアトピーなどは親が連れて行った時、やり方を習って親御さん自身が自分で治療するのですが、不思議に2~3か月でほとんど治っていくのです。正に驚異であるといわざるを得ません。

症例を紹介します

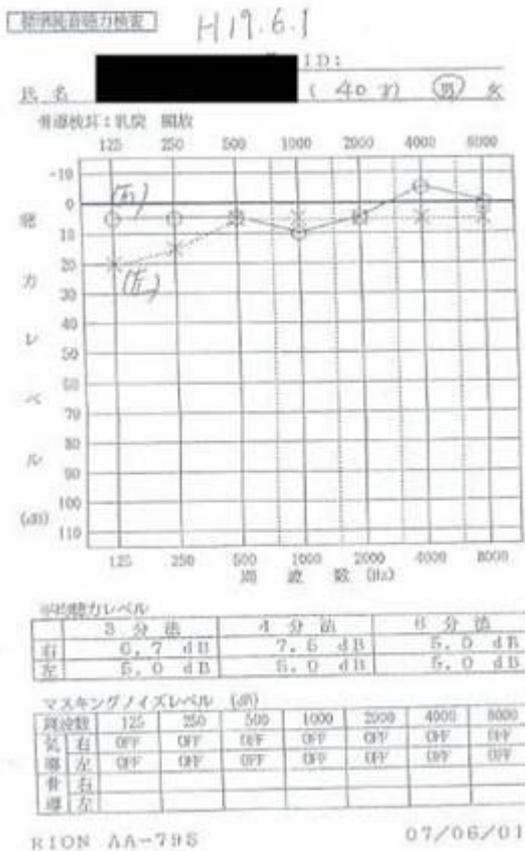
第5例

40才、男性、自営業

平成19年4月9日

最初は左耳に聞こえる声がブルブルと震えたように聞こえた。突然何ともなくなり、1週間は何事もなかった。再び左の耳が水中に潜ったように詰まった感じとなった。4月16日耳鼻科に受診。中度難聴となっているといわれ、特に低音域がいちじるしいと。ステロイドホルモン投与開始。内服で経過がよくないため、入院してステロイドホルモンの点滴治療。中度の難聴のまま5月8日退院。

5月10日、御申じょう療法開始。自分でも御申じょうを購入して、自宅でも同時に行う。内服薬は中止。6回目の治療後、大学病院の聴力検査が別表のごとく、ほぼ正常となった。
(×印が左耳)



第6例

82才、男性

30年前、交通事故により、左大腿骨開放骨折、左脛骨。皮骨骨折、左腓骨神経切断となる。」その後長期にわたり激しい幻肢痛に悩まされる。新嫌悪先端に出来た神経腫と周囲組織の癒着剥離術を数十回施行。痛みは軽くなるどころか、夜間には特に激痛が走る。御申じょう療法を開始。一回目で痛みが少し減った。いつもの1/3程度かなあ・・・という程度。大体6回の治療で痛みを忘れた。



腓骨神経切断部

連絡先：貴峰道（日本貴峰道協会）代表 貴田晞照

T e l 03 - 3460 - 0901

F a x 03 - 3460 - 0902

参考文献

貴田晞照著：超医療 御申じょう

松本元著：神経興奮の現象と実体

松本元著：“脳は愛のためにある”「愛は科学で解けるのか」

〈梶川病院（広島市西区天満町）梶川憲治医師〉